



動物レスキュー通信

2021年11月 第102号 (令和3年11月1日発行)

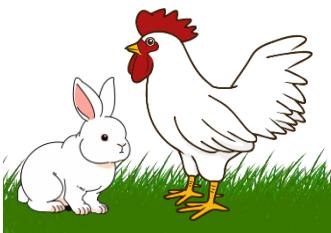
発行元

一般財団法人 国連世界動物救済支援機構 詩月財団

詩月 (しづく) : 詩月財団 理事長
愛玩動物飼養管理士 一級
ペット災害危機管理士 三級
お問い合わせ : sizuku.foundation@gmail.com

学校での動物飼育

どのような効果がある？



私は小学生の頃「飼育委員」をしていました。私の学校では4年生になると何かの委員にならないといけないことになっていて、風紀委員、美化委員など他にもいろいろあったのですが、私は飼育委員を選びました。なぜ、飼育委員を選んだのかはハッキリ覚えていないのですが、飼育委員は動物のお世話をするのでから、休日はもちろんお盆やお正月なども当たり前のようにお世話をしなくちゃいけません。そのお世話を一度も「嫌だな」と思ったことはなかったので、きつとこの頃から動物が好きだったんだらうな、と今になって思います。そんな学校での動物飼育ですが、年々減少していると言われています。全国学校飼育動物研究会会長が行った調査では2003年〜2012年には93.4%が学校の屋内外で動物を飼育していましたが、2017年〜2018年に7.9%減少し、85.8%が学校の屋内外で動物を飼育しています。

飼育できる上に、休みの日などは担当を決めて自宅でも面倒を見る事もできますし、清掃や餌など、その他の事もウサギやニワトリに比べれば断然やりやすいのが現状です。

動物飼育の効果

飼育委員を経験し、土日や長期休暇でも交代で学校に行ってお世話をするという経験を経て、私自身は命に付いて学んだと思っています。2004年に長崎県佐世保市女子児童殺害事件が起きた際、長崎県教育委員会が「生と死」のイメージに関する意識調査を行った際、小学生の12.7%が「死んだ動物は生き返る」と思っており、15.4%が「死んだ人は生き返る」と思っているという結果が出ました。それには子供たちを取り巻く環境が大きく関係していると思います。日常的にテレビゲームやインターネットを使用しており、その影響で「ゲームではリセットできるから」「インターネットやテレビなどで話を聞いたことがある」「映画などで

して大切にかわいがってきた動物の死に直面することによって生死と対峙しながら生命の尊さを学ぶことが弱い立場の動物への慈悲の心や、人に対しての思いやり、優しさを身につけると言えます。動物の飼育経験を通して動物の変化に関心をもち「動物がいつも元気でいられるにはどうすればいいのか?」「どんな食べ物が好きなのか?」「どんな環境で過ごすのが好きなのか?」などと考える事を通して、相手の立場になって考える事、他人の気持ちを理解しようとする事に繋がってきます。また、お世話することの楽しさや責任感と同時に生命の尊さを知ることになります。日々、動物のお世話をすることによって動物の変化に気づくことが出来るようになってきます。普段と違う動物の変化に気付きやすくなり、病気の際のお世話などもするようになる

ることと思います。動物からの愛を感じ、自分からの動物への愛も感じる事が出来る心になってきます。人に対しても、相手が辛そうにしていたり、悲しそうにしている時には「大丈夫?」と声をかけてあげたり、今自分にできる事は何だろうか?と考える事も出来るようになります。その他にも自分が動物から頼られる立場となり、自らの価値に気付く。動物の次の行動を洞察し対応しなくてはならない場面に出くわすことによって思考力や決断力などを養い、ハプニングへの対応力が高まる。動物と言う大切な存在を友人と共有・協力することにより、友人関係を冷静に見直すことが出来る。日々、動物への細やかな気遣いをする事によって、自身に子供ができた際に自然と育てる事が出来るマザリング効果が期待できる。このように、子供の頃から動物と接する事、学校での動物の飼育体験はとても大切に貴重な経験だと言えます。(詩月)

また、私が飼育委員だったころはウサギとニワトリを飼育していました。先ほどの調査の際には2003年〜2012年でウサギ26.5%、ニワトリ11.9%、メダカ・魚類31.8%でしたが、2017年〜2018年にはウサギ21.1%、ニワトリ5.9%と減少し、メダカ・魚類55.2%と大きく増えています。ウサギや鳥の飼育が減少している理由としては長期休暇や土日のお世話が大変、飼育舎の清掃が大変、病気やけがの処置が大変、死亡時の対応が大変、児童への感染症やアレルギーの心配がある、餌の確保が困難などです。その点、メダカなどは室内で

飼育できる上に、休みの日などは担当を決めて自宅でも面倒を見る事もできますし、清掃や餌など、その他の事もウサギやニワトリに比べれば断然やりやすいのが現状です。

飼育委員を経験し、土日や長期休暇でも交代で学校に行ってお世話をするという経験を経て、私自身は命に付いて学んだと思っています。2004年に長崎県佐世保市女子児童殺害事件が起きた際、長崎県教育委員会が「生と死」のイメージに関する意識調査を行った際、小学生の12.7%が「死んだ動物は生き返る」と思っており、15.4%が「死んだ人は生き返る」と思っているという結果が出ました。それには子供たちを取り巻く環境が大きく関係していると思います。日常的にテレビゲームやインターネットを使用しており、その影響で「ゲームではリセットできるから」「インターネットやテレビなどで話を聞いたことがある」「映画などで

して大切にかわいがってきた動物の死に直面することによって生死と対峙しながら生命の尊さを学ぶことが弱い立場の動物への慈悲の心や、人に対しての思いやり、優しさを身につけると言えます。動物の飼育経験を通して動物の変化に関心をもち「動物がいつも元気でいられるにはどうすればいいのか?」「どんな食べ物が好きなのか?」「どんな環境で過ごすのが好きなのか?」などと考える事を通して、相手の立場になって考える事、他人の気持ちを理解しようとする事に繋がってきます。また、お世話することの楽しさや責任感と同時に生命の尊さを知ることになります。日々、動物のお世話をすることによって動物の変化に気づくことが出来るようになってきます。普段と違う動物の変化に気付きやすくなり、病気の際のお世話などもするようになる